

発行日 2012年4月20日（隔月20日発行） 通巻294号

日本国際ボランティアセンター 会報誌
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

No.294

May-June 2012

特集

新事務所で森の暮らしにふれる

岡山県西粟倉村大茅地区にある森林。100年以上にわたる丁寧で地道な森づくりはこのような美しい森林を育む。



Japan International Volunteer Center

新事務所で森の暮らしにふれる

2012年2月末、JVC東京事務所は長年お世話になった御徒町の丸幸ビルから一駅となりの秋葉原にあるビルに移転した。この写真は新事務所の一角。「…これがJVC?」と言われそうな、木のぬくもりあふれたこの空間が生まれた経緯をお伝えする。

(編集部)

二十年ぶりの引越しにあたって

事務局長 清水俊弘

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、東京にいる私たちにとっても他人事ではなかった。JVCが入居している丸幸ビルも老朽化しており、これから先不安を抱えながら仕事をやるよりも、いくらかでも安全な場所に拠点を移そうという事になった。以下に、移転先探しから、新事務所完成までのてん末を報告する。

■どんな事務所にしたいか？

さて、具体的な移転候補地が決まったら、次に考えることは「どんな事務所」にしたいかだ。一定の耐震強度があることはもとより、自分たちの生活時間の多くを過ごす場所として、また何よりも社会の諸問題を考

える団体としてふさわしい事務所の在り方とはどんなものなのかも考えたい。そこで、新しい事務所を単に「事務仕事をする場所」として考えるのではなく、①JVCの活動を体現できる発信基地に、②JVCが掲げる持続可能な社会づくりに即したしっかりしたコンセプトのある事務所にしようということになった。

■どういうところに引越せばいいか？

移転先の条件としては以下のようなことを考えた。①新耐震基準（昭和五十六年施行）を満たしていること、②現在の場所から遠くないところ、③いろいろな方に来てもらいやすいところ、そして④家賃負担が過度にならないこと、などだった。この条件をもとに若手スタッフによる「物件探索チーム」が七月に結成され、真夏の物件探し作業が展開された。その結果、丸幸ビルから歩いて十五分ほどのところ

■西栗倉・森の学校との出会い

真つ先に思いついたのが、以前拝見した山林の間伐材を使った事務所づくりを提案・実践している株式会社トビムシの事務所だ。トビムシは、岡山県西栗倉村にある株式会社西栗倉・森の学校が生産する間伐材商品の紹介窓口になっている。森、そして森とともに生きる人々の暮らしを守るためには、間伐などしっかりとした森の管理が必要だ。その間伐によって生み出される木材に付加価値をつけて多くの人に利用してもらうサイクルができれば、経営的にも成り立つ。同じ台東区内に



■西栗倉・森の学校代表の牧さん(左)から、間伐材でできた床タイルの説明を受ける。



■スタッフ自らタイルを敷きつめた床。汚すのは忍びないので、フロアは土足禁止に。



■引越し当日。かなりの資料を廃棄したとはいえ、運び込んだ荷物も相当量になった。



■書架も間伐材製品で。小さい箱(フタあり/なし)を並べることで書架としている。



■事務所フロアのエントランス。なんと表札も間伐材にロゴを焼印加工したものに。

ありながら木の香りがたつぷりのトビムシの事務所を見た印象が鮮明によりがえり、我々もぜひ間伐材を利用した仕事空間づくりができないかと、早速、西栗倉・森の学校と連絡を取り、代表の牧さんとお会いすることにした。もちろんお金のかかることでもあるので、事務所全体を木の内装で固めることはできないが、たとえ一部であろうとも、そうした思いの詰まった間伐材を使うことで、僕らもその環の中につながる価値があると思った。

■皆で作った新事務所

森の学校との交渉がまとま

り、事務所の床に檜の間伐材で作った床タイルを敷きつめることになった。約六十坪の床に八百枚の檜のタイルを張る作業はスタッフ全員で取り組んだ。一日かけて敷きつめた木の床により、事務所全体が檜の香りに包まれ、また無垢の木特有の素朴な白さが光に反射してとても明るい事務所となった。その後、保護用の蜜ろうワックスの塗布作業も終え、いよいよ什器(机や棚など)の搬入だ。スチール製の机やキャビネットは最低限に抑え、どうせ同じお金をかけるならできるだけ間伐材製品を使おうと、打ち合わせ用のテーブルや書架などは森の学校

の製品を取り寄せた。

こうして完成した新しい事務所は、仕事空間として快適であるだけでなく、物理的な距離を超えて我々自身が常に木の生い立ちや、伐採管理する人の顔、製材している人の顔、そして森とともに暮らす人々の暮らしを感じとることのできる空間となった。

■こんなことを近づけたい

私たちは、NGOとして国内外の様々な地域で暮らす人々とともに、平和で持続可能な社会の実現を目指して活動している。そのためには可能な限り、”言ってることとやってるこ

と”を接近させなければならな

いと思っている。

カンボジアやラオスなどで自然資源の持続的な有効利用について考えている私たちが、東京という無機質な都会で、再生不可能なエネルギーを使って仕事をすることに少なからず矛盾や後ろめたさを感じてきた。

今回の引越しは、私たちの活動の在り方と実際を近づける、いや近づける努力をしなければならぬことを再認識する機会ともなった。新しくなったJVCの事務所にぜひお寄りいただき、檜の香りを楽しみながら、国内外の森林にも思いを馳せてほしい。

間伐材のオフィスで森も人も元気に

株式会社西栗倉・森の学校 牧大介

■百年かけて森をつくる村

岡山県の北東、鳥取県・兵庫
に接する県境に位置する
西栗倉村は、人口約千六百人の
源流域にある小さな山里です。

この村は、〇四年に他村と合併
せずに村として自立していくこ
とを選択し、〇八年に「百年の
森林構想」を掲げました。以降、
村全体で間伐を推進し、森の再
生から地域の再生を実現しよう
としています。

西栗倉村の人たちは、子や孫
のためにという想いで一生懸命
植林をしてきたわけですが、植
林した頃よりも木材価格は大幅
に下落しており、多くの森が放
置されてしまっている状況にあ
ります。これは西栗倉村に限ら
ず、日本全体で起きている問題
です。先進国の中で、フィンラ
ンドに次ぐ高い森林率の日本。
森林資源に恵まれているこの国
で、森は放置され、荒廃が進ん
でしまっています。その一方
で、森林破壊を伴う伐採が世界

各地で横行し、その地域にいる
人たちの暮らしも同時に壊して
しまっている。そうして生産さ
れた木材を日本はたくさん輸入
しているという矛盾した状況が
あります。

西栗倉村では、足元にある森
林という資源を活かし、適切な
森林管理を村全体で実践し、そ
の上で木材を生産し、それを加
工して最終製品にまで加工し、
村からお客さまにお届けしてい
くというチャレンジを始めまし
た。適切な森林管理に関する国
際的な第三者認証であるFSC
森林認証も取得しています。植
えてから約五十年が経つ西栗倉
村の人工林。「百年の森林構想」
とは、それをここで放置するこ
となく、あと五十年間しっかり
手入れを続け、美しく豊かな「百
年の森林」に囲まれた村を五十
年がかりでつくりあげようとい
うものなのです。

そしてこの構想を実現する力
は、間伐材を売れる商品にし
て流通させること。そのために
設立されたのが、株式会社西栗
倉・森の学校（以下森の学校）と
いう会社です。

■真面目な間伐とは？

木材価格が下落して儲からな
いから山が放置され、間伐とい
う重要な山の手入れが進まない
わけですから、間伐材が商品に
なっけしつかり売ればそれで
問題は解決します。しかし、そ
れは大変難しい問題です。

真面目に丁寧な間伐を行な
うほど、実はその間伐材自体は
商品になりにくいのです。真面
目で丁寧な間伐とは、元気で曲
がりがない太いしっかりし
た木を残して、元気がなくなり
つつあって曲がりくねっていて
細い木を間伐するということに
なります。これは劣勢木間伐と
言って、しっかりした元気な森
を育てるための基本です。しか
し、建築材料として価値を持ち
うるのは、三〜四メートルの
まっすぐで一定の太さのある木
です。そうでなければ、住宅部

材として使うことができませ
ん。そして木材利用の中心は住
宅です。住宅向けの建築材料と
いう既存市場の中では、真面目
で丁寧な間伐という作業は実は
成り立たないのです。間伐材と
して流通している木材の多く
が、実は不真面目な間伐、つま
り元気で立派な木から先に伐採
する優勢木間伐によるものだっ
たりします。

西栗倉村では、村とそこに
ある森の未来を大切にするため
に、徹底して劣勢木間伐を行
なっています。従って、間伐材
の量は順調に確保できるもの
の、それは既存市場に乗りにく
いものでした。

■力ギは商品開発にあり

こうした現状にあつて、森
の学校の仕事は、間伐材の新し
い市場を開拓することでした。
真面目な劣勢木間伐による「本
物」の間伐材から生み出せる商
品を開発し、今まで間伐材が使
われなかった場所で商品が使わ



■西栗倉・森の学校では、村に自前の建材加工工場を持っている。伐採した木材はここで建材や商品に加工される。



■延東義太さん(72歳)。おじいさんが木を植えた森を受け継ぎ、森を大切に守ってきた山主の一人。

ぐるぐる。めぐる。めぐるめく時間。



ニシアワー

ニシアワー:

西栗倉村の地域ブランドであり、地域のマーケティングコンセプト。西栗倉（ニシアワクラ）と時間（アワー）をつなぎ、村の時間の積み重ねをお客様と共有していくモノづくりと流通を実現していくという考え方をあらわしたもの。ウェブサイトのニシアワー（<http://www.nishihour.jp/>）は、株式会社西栗倉・森の学校が運営している。

※本誌表紙、4ページ右側、5ページ右側の写真は西栗倉・森の学校に提供いただきました。



■これが無垢床タイル。裏側から硬いゴム板で補強されており、そのまま床に並べて敷きつめていくことができる。



■村の木から商品を生み出すことにチャレンジする若者たち。この5年で約50人が1ターンで村に移住してきている。

れて、ユーザーに喜ばれることがミッションとなります。

そこで目をつけたのが、オフィスという場所でした。鉄筋コンクリートのビルの中にある無機質な空間だからこそ、温かみのある本物の木を使っていたきたいと考えました。木の香りは、心をリフレッシュさせる効果があるとされています。さらに湿度調整機能も高く、部屋が乾燥しすぎたり、過度にじめじめすることも防ぐことができます。こうして「間伐材のオフィス」への取り組みが始まり、そこから開発した商品が、無垢床タイルです。従来のタイルカーペットと同じ五十センチ四方の寸法。従来の建築材料であれば通常三メートルの長さが必要なのですが、これであれば曲が

りのある間伐材からも作ることができます。

「本物」の間伐材を有効利用できるということの他に、この無垢床タイルにはDIYで（購入者自ら）設置できる、という特徴があります。施工会社に工事をお願いするとかなりのお金がかかりますが、無垢床タイルを購入してDIY設置していただければ材料費だけで済みま

フィスビルの床を間伐材で敷きつめていくことができれば、西栗倉村の森だけでなく、日本中の森を再生させていくこともできるかもしれません。

■間伐材商品で村とお客さまを結ぶ

DIYで設置できる商品にすることでエンドユーザーへの直販が可能になるということには、山村が自立していく上で非常に大きな意味があります。地域が直接お客様とつながることで、大企業の下請けとして疲弊し続けてきた従来のポジションから地域が脱却できるのです。大量生産・大量消費の流通の中では、村はただ材料を提供するだけというポジションでした。自前のお客様を持たないために、お客さまをもっている立場の強い大企業からは存続が困難なほどの低価格を求められ、さらには調達先が海外になっていくということも梯子を外されるということも続いてきました。

この縦割りの流通から脱却し、西栗倉村という小さな村が自前のお客様を持つことができるようにすることは、森の学校にとっても重要なテーマでした。西栗倉村の地域ブランドであるニシアワーのロゴ（写真

上）には、縦割りの流通から脱却し、地域内の連携による顧客創出し、好循環を生み出していきたいという想いを込めています。

◎

先般、JVCさんの新オフィスでスタッフの方々にユカハリをしていただき、さらに間伐材を使ったオフィス家具も購入していただきました。木の香りがある間伐材のオフィスが、お客さまの手によって新しく生まれました。私たちが理想とする形で、木をお届けすることができたと考えています。そして、新オフィスのオープンを記念して開催されたイベントでは、来場者の方々に実際にユカハリされた床や家具も見ていただき、また私からも西栗倉村の取り組みを紹介させていただくことを通して、実際に木に関わっている村の人たちの想いも一緒にお届けすることができました。まだまだ私たちの挑戦は始まったばかりです。ユカハリが広まっていけば、西栗倉村の森と地域が、さらには日本の森と地域が再生されていく可能性があります。そうなることを目指して、これからもチャレンジを続けていきたいと考えています。

ソマリアの現在を注視する

スーダン事業担当
佐伯 美苗



■ソマリアからの難民の流れ（2011年7月時点、ピーク時）

多くの四十歳以上の方は「またか」の思いを抱かれたであろう、「ソマリアの飢餓」。昨二〇一一年五月ごろから国連諸機関の注目が高くなり、JVCにおいても六月に情報収集を開始した。七月には、国連によりソマリア南部の二地域が「飢饉」状態があると認定され（その後十一月と翌二月に解除、相前後して日本においてもキャンプペーンが始まり、報道でも一千万人以上が生命を脅かされている、過去六十年間で最悪の状況、全人口の三分の一が故郷を離れた…等々、喧伝され、ケニアの難民キャンプで保護された子どもたちの画像があふれた。

■予備調査の実施

ソマリアは植民地支配を脱し、一九六〇年に独立を果たしたが、ソマリ人にとって不本意な形態を残した。「大ソマリア主義」に代表される領土と国民国家の矛盾は、なおソマリアに関する問題の根底に残されている。一方、国内の多くの内陸地域は気候条件が厳しく、八〇年代以降、一般住民は終わりの見えない戦争にさらされ続け、ために社会不安が常態化し、主な生業である牧畜と農耕は深刻な打撃を受けている。

同時にソビエト連邦と米国の軍事的政治的駆け引きが顕著となり、世界的に注目度は増し、援助キャンペーンもピークとなった。九〇年代には各地の割拠状態が進み、さらにPKO派遣が状況を却って悪化させたとも見られている。

そのようなソマリアでは、飢饉はけっして想定外の災害ではない。しかし、なぜ「今年が過去六十年で最悪」なのか。「いつたいたに起こっているのか？」「じつになにが原因なのか？」「じつに素朴な疑問に動かされ、JVCでもアフリカ事業担当三名が情報収集、また他団体との情報交換を開始し、九月には今井高樹

（スーダン現地代表）がケニア、渡辺直子（南アフリカ現地代表）がエチオピアへそれぞれ予備調査を実施した。

結果、今井はケニアのソマリア難民キャンプ「ダダブ」に難民人口実に四十五万人での視察を行ない、キャンプの実態と課題に触れ、JVCがソマリアに関わる活動の可能性を提示した。一方の渡辺は、エチオピアの難民受け入れ地域の支援を行なうソマリ人の団体からその活動と意義に触れ、東アフリカ地域全体を意識することの重要性を提示した。

こうして両名が大きな成果を持ち帰ったが、もともとの疑問の解消にはいたらず、言い換えれば、即時対応を要する状態との確信も得られなかった。しかし、なぜ不安定な状態になっているのか、我々になにができるのか、という「現在のソマリア」に再び目を向ける機運は事務局内で高まった。なお、昨年七月以降、日本から三団体がソマリア支援活動を開始している。

■ソマリアへの関わり

JVCは団体の草創期から転換点を迎えた八〇年代半ばにソマリアでの支援活動を開始し、諸事情によりやむなくソマリア

を離脱して十八年余りになる。その間国際援助の傾向も、東アフリカ地域の情勢も、そしてJVCの活動も大きく様変わりした。二〇一二年の今、日本のNGOであるJVCがソマリアにどのような関わりを示すのか。調査結果に基づいて議論を重ね、今後の計画としては「勉強会を続ける」を結論とした。

読者諸兄弟にはがっかりされるかもしれないが、われわれ自身も、現在の事務局体制と財政状況の中で、闇雲に走り始めては地に足の着いた調査や支援の成果をあげられないのではないかと、という懸念が一方にあり、さりとて、勉強会だけでは活動開始の意義を理解しながらも、調査や活動への推進力を失うのではないかと、という不安も強い。しかしながら、ただ今のJVCが、「今のソマリア」に追いついていないという現状を踏まえ、アンテナを張り巡らせることから始めねばならない、という点で一致した。

こうして一二年度は、活動の実施を常に意識した勉強会を継続開催する。JVCが今後「ソマリア」にどのように関わろうとするのか、見定めようとするわれわれの試行錯誤に注目していただければ幸いである。

タイの農村で学ぶインターンシップ 第12期生帰国報告会

タイ事業担当 宮田 敬子

■悩み、考え、話し合う

昨年八月末、「タイの農村で学ぶインターンシッププログラム・十二期」は開始した。このプログラムは、国際協力や環境問題に関心のある日本人をタイの農村に長期間派遣し、「開発」や「支援」における視点や考え方を身につけるためのものである。九九年から始まったこのプログラムは今回で十二期目を迎え、今回は六名が参加をし七ヶ月間タイの農村部を拠点に過ごしてきた。

皆がタイへ渡った七カ月前を思い出す。不安と期待が混じった六名は、日本との生活の違いに戸惑い、体調を崩し、悩んでいた。「国際協力」を学びに来たのに、タイの人々とうまくコミュニケーションが取れず、自分の嫌な部分が見えたりした。「支援」とは何か、「開発」にゴールはあるのか、NGOはそもそも必要か、真剣に語りあった。しかし、ただインターン同士で語り合っていたわけではない。答えを求めて、タイの農民やNGOスタッフと時間を共に過ごした。広大な田んぼでひたすら稲を刈った。ゴミ埋立地で暮らす人々と共にゴミを拾いながら、そこで生計を立てていく

ことのありのままの姿を見た。

■そして伝えたことは

そして、今年三月末に日本へ帰国。常夏のタイからまだ冬の寒さが残る日本へと降り立った。少々疲れが溜まっていたものの皆すっきりした顔つきであった。これから自分たちの理想にどうやって近づいていこうか、七カ月前とは違った期待と不安の顔が見える。

帰国翌日の三月二十九日、都内下北沢にあるイベントカフェで帰国報告会を行なった。帰国して間もないインターン生たちは、来場者に何を伝えるべきかを長い時間考えた。「この七ヶ月間学んだことを言葉にして伝えることは難しい」皆が口々に言った。

報告会の最初は農村の暮らしの様子を報告。村の中で色々な遊び道具を自分たちで作り出していく子どもたち、自給用に野菜、果物、米をつくりながら暮らしを営む農民たち、そして自然と共に生きる人々の生きる力の強さ。あるインターン生は「途上国の支援をしたいと思っていただけで、自分たちの必要なのは自分たちで創りだす人々に支援をするなんておこがましいのではないかと考えるように

なった」と、農村での自分との葛藤の様子を率直に伝えた。

次にゴミ埋立地に住む人々の様子を報告。ゴミの中から資源となるプラスチックや缶ビンを集めて生計を立てている。ここでは「外から見れば『可哀相な状況にある人々』であるが、そこで暮らす人たちは幸せそうな顔をしている。重要なのは外と内の視点の両方を持つことではないか」と、実際に現場に入り、共に生活をしたからこそわかってきたことを伝えた。

「生きる力というのは、他人にコントロールされずに、自分たちで生きるために必要なものを創りだす力だと思っています。それをタイの人たちから学びました」この言葉は、深夜まで話し合っていた決めた言葉だ。最後に、インターン生の一人が「国際協力がどうあるべきかという明確



■報告会で自らの体験や考えを思い思いの言葉で伝えるインターン生たち。

な答えは出ていません。けれど、タイで過ごし、様々な人たちと出会って、自分たちが貧困など世界の様々な問題を引き起こしている一部分であるということがわかりました。自分たちが変わることで、それが大切なではないかと思っています」という言葉で締めくくった。

■まだ始まったばかり！

インターンとしてのプログラム期間は終了したが、今後この経験を自分たちが生きていく日本社会にどう落とし込んでいくか、その取り組みは続いていく。

このプログラムのOB/OGの進路は様々である。農の道へ進んだ人、自然食レストランを営む人、NPOやNGOスタッフとして活動する人。立場は違えど目指す方向は同じ、皆心の豊かな社会を自分たちで作っていくことを目指し、悩みながらも実践している。私自身もOGの一人だが、私はNGOの道を選んだ。インターンを修了した彼女ら六名は、これから悩み続けるかもしれないけれど、このプログラムで得た経験や出会った仲間が助けてくれる。これからどんな道を選ぶのだろうか。私だけでなくタイの人たちも楽しみにしている。

「こちら南相馬災害FM!」

～福島から伝えたいこの一年～

震災支援担当 白川 徹

■原発からほど近い南相馬

東日本大震災から一年。「南相馬災害FM」のディレクター今野聡さんと機材担当の今野由喜さんを東京にお招きし、JVC南相馬駐在員の檣崎知行を交えて、災害FMの活動を通して福島県の現状を紹介するイベントを三月十日に開催しました。

南相馬市は事故を起こした福島第一原発の北に位置しており、原発から二十キロ以内に入る市南部の小高区は「警戒区域」に指定され、現在に至るまで閉鎖されています。津波の被害も甚大で、約六百五十人の方が亡くなりました。震災当時には市が独自で避難指示を出し、七万二千人の人口が一時一万人を割り込むまでになりました。JVCは南相馬市の災害FMを昨年四月から支援してきました。当初はアナウンサー二名とJVCの駐在員一名という脆弱な運営体制でしたが、現在では総勢九名のスタッフが働き、市民の絆をつなぐコミュニティFMを目指すまでになりました。

■生き残ったのならば

今野由喜さんは震災当時、小高区の海岸沿いに住んでいました。家族を逃し終わった後、車で逃げようとしたところを津

波に飲み込まれました。「車に乗ってエンジンをつけた所で、いきなり車がふわっと浮きました。まわりにあつた家や軽自動車も波に流されていました。後でわかったのですが、百メートル以上流されました。車は瓦礫に囲まれ、ドアを開けることもできませんでした。しばらくするとだんだん車内に水が入ってきて、自分の首まで水が来まして。何度も水を飲みました。人が死ぬというのはこういうことなのかな、と感じました」

由喜さんはその後救助されましたが、原発事故の影響で山形に避難することになりました。「ものすごく危険な状況で、私は生き残ってしまつた。死んだ方々もいます。何がそうなの、こうなつたかわからない。その意味を考えました。神様が、お前はまだやることがあるから、と残してくれたのではないかと思うようにしています」

由喜さんは昨年五月からFM局にボランティアとして参加、放送を支えてきました。その後十二月にはNPO「つながっぺ南相馬」を立ち上げ、JVCの支援を受けて仮設住宅で被災者のために活動しています。

今野聡さんは七月からFM局に参加。今の気持ちをこのように話していました。「自分が

できる何かをしたい、という気持ちがありました。しかし、もともと地元が好きなのでなかったんです。進学で東京に出たときは『よかったな』と思いました。FM局で働き出し取材をしていく過程で、地元のために何かをしたい、というた

くさんの人に会いました。市外から来ているボランティアの人たちの頑張る姿も見ました。しかし、故郷に思い入れの無い私は、自分の気持ちを整理できないでいました。

■分断はなにも生まない

今、南相馬では常に放射能のことを考えなくてはなりません。そんな状況に強い怒りを感じます。『つまらないなあ』と愚痴を言っていた、そんな何でもない普段の生活が、本当は大

事な生活だったと改めて気づいたんです。なんとかして日常を取り戻したいと思っています」



■スタジオで機材操作する今野由喜さん。FM局の運営を支えてきた。

コミュニティの中で放射能に関する考え方の違いでの対立が。そして、市外の人間から心ない言葉をかけられることもあるそうです。「南相馬に住んでいるなんて危ない。家族で暮らすなんてあなたは子どものことを考えていない!」それに対して、由喜さんはこのように仰っていました。「これから精神的な支援はいただけたらと思います。けれど、まるで南相馬にすることが罪であるような発言はやめていただきたい。誰もが悩んで、ここに残るかそれとも離れるか、という難しい決断をしたのですから」

南相馬災害FMは今後、地域の絆を支えるFM局として発展していこうとしています。JVCは今後も南相馬の人々とともに、この困難な状況を一緒に歩いていきたいと考えています。

※注① 小高区の閉鎖：4月初旬執筆時。新聞報道などでは4月16日に小高区の一部が開放されるとのこと。

地元南相馬で真正面から暮らしていく

南相馬災害FM ディレクター
今野 聡



■自らの被災体験を淡々と話す
今野聡さん。

■震災直後、飯館村に避難

震災から一年、いろいろなことがありました。あつという間に過ぎた一年と感じます。

被災当時、余震が続き落ちつかない中で起きた原発の事故。テレビに映し出された衝撃的な爆発の映像。気が遠くなるような絶望感と底なしの恐怖心に打ちのめされたのを覚えています。屋内退避を呼びかけられても、その「恐怖」は姿が見えないものでした。窓を開けず家に閉じこもっても、余震が来れば一番の策は「家屋の外の庭に出ること」。その都度のためにしながら窓に手をかけ、不安とともに揺れがおさまるのを待つ、その繰り返しでした。

原発から三十キロに住んでいる私は、一日中状況を気にして、寝る時もテレビをつけた放しで茶の間で就寝。ライフラインはしっかりしていたものの、電話とインターネット回線の不具合が続く、情報はテレビのみ。繰り返される同じような情報のもと、「少しでも遠くへ」と、まず避難した先が飯館村でした。南相馬市から多くの市民が、飯館村の避難所にお世話になりました。しかし、本当は飯館村はちょうどその頃、ひどく放射能に汚染されてしまった時

期でした。

放射性物質を多く含んだ雪が三月も下旬というのに降りしき中、ストーブが点いていても暖まることのない広い体育館、何枚も毛布をかぶっても冷える体で、老親と三人過ごしました。私たちはわずかに二晩だけでしたが、こんな避難所暮らしを半年以上も送っていた方も多いと思うと本当に大変だったろうなと思います。

飯館村では村の職員の方々がとても良くしてくださって、二日目にはお風呂にも入ることができました。その飯館村が、今では全村避難で人がいない街になったことにはやりきれない悲しさを感じます。そして私たちの命、子どもたちの未来を脅かしたといえる、本来の役目を果たせなかった「スピーディー」の対応……。怒りを覚えます。

■街から人がいなくなる、その恐ろしさの淵で

南相馬市では避難を呼びかけてバスを出したことで、原発事故後、七万人の人口が一時は一万人を切るまでになったと言われています。私も、ガソリンが得られたことで、その後は三週間ほど東京の親戚宅で避難生活を送りました。

あの時、すべての南相馬市民

は「見えない恐怖」と向き合いました。自分はどうなるのか、街がどうなってしまうのか、表現できない底なしの不安を感じていたと思います。隣近所の人とほとんどいなくなる、残れば死ぬかもしれない、逃げれば帰れないかもしれない……。想像を絶する出来事が起きていたんだと、今になってみれば冷静に振り返れます。緊迫したギリギリの生活の中で人の醜さも感じ、しかし思いやりや優しさにも触れました。皆が「生きる」ことに真正面から向き合っていたがみついて日々を過ごしていたのです。

最近東京の赤坂に行く機会がありました。自分の目の前にある街の風景が、まるでスクリーンの向こう側のような非現実な世界に感じました。街を歩く人々は笑顔で、何も悩みが無く人々は見えてしまい、まるで血の通わない「アンドロイド」のように感じました。本当は、南相馬市こそが非現実的な世界なのに。

日々悩み、小さな傷から少しずつ血を流して苦しみながらも「生きる」、南相馬の市民の間人々。皮肉なことに南相馬市は、人間がもっとも人間らしい、日本でいま一番美しく魅力的な場所だと思うことがあります。

す。南相馬災害FMで放送している若者のトーク番組で、出演者が語ったこの一年の感想の中に、「世代や地域を越えていろいろな考え方を知ることができた。充実した一年」という一言がありました。凄く言葉です。この苦しい環境の中から得たものの「充実」。人間は逆境の中で、強くなることができるのかもしれません。

■それでも生きていくために

南相馬市は、復旧・復興へ向けてゆっくりと動き始めました。しかし、放射能への不安はいつまでもずっとまとわりつきます。そうした中で、それぞれがそれぞれの思いで、感じ、判断しています。答えはありません。一人ひとり考えや生き方が違う世界。それをしっかりと理解し認め合い、自分自身の生き方を迷いながらも選んでいくのでしよう。本当の人間らしさとは、実はそんな中にあるのかもしれません。

南相馬災害FMでは、そんな市民の皆さんの生活での小さな言葉や想い、楽しさ、辛さ、悲しみや記憶、ささいな体験などを伝えていければと思っています。これからどうぞ南相馬災害FMをよろしく願っています。

「俺も農業やってんだけどさ〜」

代表理事 谷山 博史



自宅のある高円寺で、今年から阿波踊りを始めた。私の持ち場は締太鼓だ。中年の素人が20年以上のベテランに交じって練習する。皆地元の人なので話の輪に入るのがなかなか難しい。何々ちゃんがどうのこうのと、他のチーム（連という）の人の噂となるとまったくついていけない。それでも歯を食いしばって毎回練習と飲み会に出ている。

もうひとつの趣味は、PARCが主催する『東京で農業』の研修だ。今年で3年目に入った。毎年30種類近くの野菜を作る。一畝（約1アール）程度の畑を5〜6人のチームで耕す

のだが、鍬を振るう時は腰にくる。夏のキュウリやトマト、ナスはいつも食べきれずに難渋する。でも土に触れると元気が出てくる。

忙しいのによくやるよ、と言われる。そう、われながら意地になっているようだ。JVCに関わってから私はずっと農業だ、コミュニティが大事だと言ってきた。しかしそう言う当の本人は農業にもコミュニティにも関わっていない。ここでそろそろ言っていることとやっていることを近づけようと思い立った。おかげで、南アフリカに行った時は菜園をやっている人と、「トマトの脇芽採

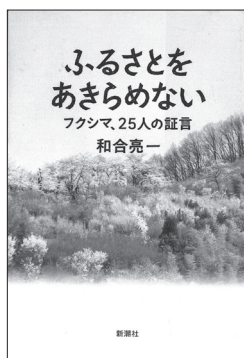
りが大変なんだよね」などといったばしに「実践者」の会話を交わすことができた。南相馬では「俺も阿波踊りやってるから野馬追いの大切さがわかる」などと利いた風なことを言う。少し軽すぎるが気持ちは通じる。

実は、農業も阿波踊りも連れ合いが先に始めた。自分でもやりたいと思いながら踏ん切りがつかなかったが、着々とお膳立てができていた。人を巻き込むことを仕事にしている私が、どんどん巻き込まれていく。次は何に巻き込まれていくのやら、今度は地元の自治会に関心を示しているようだ。くわばらくわばら…。

『ふるさとをあきらめない フクシマ、25人の証言』

和合 亮一著／新潮社／2012年／1,500円＋税

みるよむきく



本書は、福島在住のすぐれた現代詩人であり現役の高校教師でもある和合亮一氏がまとめた聞き書き集。福島各地の被災地を回って、酪農家やアナウンサー、旅館経営者、主婦など二十五人にインタビューしている。JVCが支援する南相馬災害FMの今野聡さんや「そうまかえる新聞」を創刊した酒井ほずみさんも取材されている。「十五万人もの人が（中略）今後さまざまな

問題に直面する。そういった人たちの放っておけないですよ。新聞社として、新聞記者としてできることは何なのかという事が心の中の多くを占めている」、「日に日に先が見えなくなる。子どもたちのことをすごく考えるようになった」、「あの震災が起こった時にこの場にいたってことが何か意味がある事なんじゃないかなと思った。目をそむけたくない、見ておかなきゃ」と…和合氏の抑制された問いかけに答える、体験に裏打ちされた彼らの語りに通底するのは、怒りややりきれない悲しみ、悔しさだけではない。その大きな葛藤の先に、祈りにも似た言葉として表題の「ふるさとをあきらめない」の言葉が紡ぎだされているような気がする。

和合氏は言う。「『眼聴耳視』―常に五感を研ぎ澄ませなさい。福島が抱えている何重苦もの現実をこの精神で感じ（心の寄り辺）を探しあてなさい。未曾有の天災と人災の救いようの無さ。しかしそれでも、今なお人と人の間にある「地」の上で生きていかなければならない理由を、語りからあるいは沈黙からわかっていただきたい」。

本書を一人でも多くの人に手に取ってもらいたい。そしてちゃんと福島の声聞き、福島からの問いかけを受けとめ、福島につながってほしいと願う。
（会員 塚田悦子）

※注① 野馬追い：福島県相馬地方に伝わる伝統的な祭り。

※注② PARC：アジア太平洋資料センター。『PARC 自由学校』と題して様々な講座を開設している。

JVC は、現在 9 の国 / 地域と東日本大震災被災地で活動しています。



東日本 大震災

■宮城県気仙沼市

気仙沼市鹿折地区での復興支援活動を進めている。仮設住宅の冬対策は約 80 戸の施工を終えた。また、2 月から養殖業支援としてワカメ収穫のボランティア作業を実施。さらに、浦島小学校の地域住民と共に畑作業を行なうための準備を進めている。同小学校での国際理解教育として、コリアおよびパレスチナ事業担当が訪問し平和に関するワークショップを実施した。(下田)

■福島県南相馬市
南相馬市の仮設住宅では予定していた「サロン」が全 3 カ所でオープン。現地市民団体「つながっぺ南相馬」と各仮設住宅自治会と共同で運営中。一日約 30 人がサロンを訪れ、住民の自主活動も見え始めた。災害 FM 支援も継続中、3 月 11 日に震災と原発事故を振り返る特番を放送。(白川)



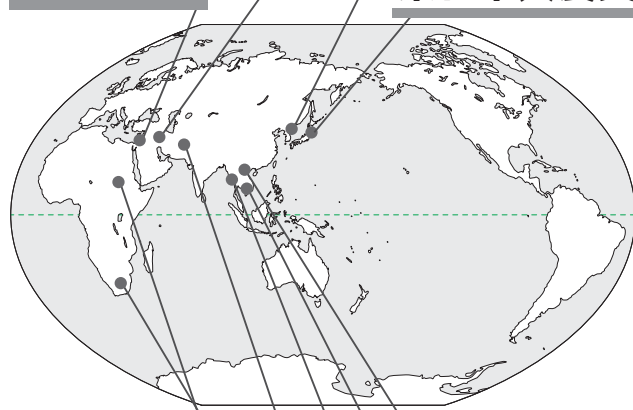
■サロンでの自主活動のひとつが輪投げ大会。人気です。

イラク

パレスチナ

コリア

東日本大震災



スーダン

南アフリカ

アフガニスタン

ラオス

カンボジア

タイ



カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07 年からシェムリアップ県東部で活動を継続中。日本からのスタディーツアー受け入れとして試験農場での作業を行なった。活動では野菜栽培などの他に堆肥研修も継続中、今回は「ぼかし」を作ったことから、堆肥・液体堆肥・ぼかしで効果を比較してみることに。

今夏予定の終了前評価に先立ち、3 月中旬に活動の中間レビューを実施。各活動のプロセス、年間スケジュールの整理、担当割合の妥当性など多くの点を検討した。

■環境教育

09 年 4 月からシェムリアップ県東部の小学校で実施。1 月以降、活動の質を高めるべく活動内容の見直しを進めている。JICA の PCM 研修に環境教育スタッフが参加し、後日スタッフ間で内容を共有した。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を 94 年から提供。引き続き土日開館、オリエンテーションを実施。

■技術学校

85 年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。会計や労務管理などを改善し、経営は安定している。職業訓練校として、日本からの見学希望も多い。(若杉)



■堆肥研修に集まった農家たち。



ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

農業では、今年の雨季 SRI 実施に向け、2011 年の雨季 SRI 実践者への聞き取り調査を

1 月に行なうとともに、SRI 乾季作のフォローアップを実施、3 月上旬にはピン郡でスタディーツアーを 2 回実施した。米銀行では、帳簿のチェックと集計を継続、8 村中 6 村では振り返り会議を行ない、必要に応じて規則を改善した。水支援では、1 村で 2 基の小型井戸の掘削と水質検査を実施するとともに、1 村で井戸修理技術研修を実施した。また、タイから講師を招き、自転車ポンプの揚水力実験と人力精米機の作製も行なった。

森林では、意識啓発の人形劇・ドラマを 1 月後半に実施。また法律カレンダーを使用しての法律研修も 7 村で実施し、村人の議論の比重を増やすなど、実施方法も工夫した。1 村で PLUP も実施し、境界線確定、土地区分、委員会や規則の設立を終わらせた。自然資源管理では、1 村で魚の保護地区、2 村で村の共有林設置の仕上げを行ない、すべての村で規則を説明する掲示板が完成した。また、ビエンチャンにて、GIS を活用した地図作りと、ゴム植林地における労働問題について、それぞれ関係者にプレゼンテーションを行なった。(平野)



■村人の意見に基づいた米銀行の規則作り。

タイ

■農村派遣研修

2月にムクダハーン県において農と命を考えるスタディーツアーを実施。日本から宗教教団青年部6名が参加。タイの農村で学ぶインターンシッププログラムでは、インターンのうち希望者4名がJVCの南タイの活動地を訪問、研修の拠点であるタイ東北部とは違う人道支援の現場を見た。

■日・タイ若手農民交流

2月に島根の農家4名が千葉の農家を訪問。お互いの農法や地域の話、原発事故の影響などの情報を交換し、経験交流を行なった。島根の農家からは「いい刺激になった。今度は千葉の農家に島根に来てほしい」と感想があった。

3月には、タイ東北部の若手農民5名が同じタイの北部の若手農家を訪問。参加者は「農法や暮らしで色々実践したいことはあるが、こうやって外を見ることでさらにアイデアが浮かんでくる」と語った。(宮田)

■南タイでの在タイビルマ人医療支援

2月後半にタイのインターン生4名を受け入れたほか、日本の学生グループ向けのスタディーツアーを実施した。地域保健員の育成については、より高度な医療知識を学ぶための研修を計画していた。これまで移動許可が取れずに地域保健員の派遣は頓挫していたが、研修生3名のパスポート取得が可能となり3月末に派遣、1年間の研修を受ける予定。(下田)



■タイ北部の若手農民を訪問、実践を学ぶ。

南アフリカ

■HIV/エイズ(リンボポ州)

リンボポ州ベンベ郡において12年4月から3年間でHIV/エイズ予防啓発および陽性者支援強化プロジェクトを実施予定。活動は現地NGO・LMCCと協働

で行なう。11年度は、そのための調査・準備期間にあたるが、2月にはプロジェクトマネージャーとして駐在予定の富田杏子が現地入りし、活動関係者へのあいさつや活動視察、またLMCCのスタッフやボランティアたちと今後の具体的なスケジュールについて協議した。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用して地域住民(約10名)対象の菜園研修を実施している。

今年度で活動期間に区切りがつくことを受けて、参加者たちによる菜園の管理・栽培状況を見るべく少しペースを落として研修を実施している。1月は具体的な研修を実施せずJVC現地スタッフが定期的に活動地を訪問、状況をフォローアップしてきた。2月にはトレーナー2名が活動地を訪問、学校および家庭菜園の状況を確認するとともに、3月19日より実施予定の事業終了時の評価の準備を行なった。並行して事業終了に向けて、JVC撤退後も参加者たちが菜園内で参照できるように写真を多く使った簡単な教材を作成している。(渡辺)



■現地NGOスタッフと協議する富田(左から二人目)。

イラク

■地域社会支援

2月5日～3月17日の間、キルクークで通算4度目の「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップを実施。ラパリー、ハリヤ、ナシール

の3地区から小学3年～中学1年生45名と、前回ワークショップ経験者が参加。出身民族が異なっても、図画工作の共同制作やゲームを通して交流した。米軍撤退後も爆破事件が頻発する中でも、地元の人々は民族の違いを超えて相互理解を進め、対立を克服する努力を止めない。

■イラク戦争の検証を求めるアドボカシー活動

イラク戦争開戦9年目の3月20日に、「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」としてシンポジウム『イラクと福島』を主催。地方自治体としてイラク戦争反対を訴えた当時の福島県知事を迎え、110名超の参加者で盛況。戦争と民主主義が相容れないとの認識を新たにした。(原)



■自己紹介ゲーム：民族ごとに違うコトバで互いを紹介。

スーダン

■紛争による避難民・難民への緊急支援を継続

昨年6月に勃発した政府軍と反政府軍(スーダン人民解放軍)との紛争は、一向に収束する見通しが立たない。戦線の拡大に伴って南コルドファン州内各地で避難民が急増。国境を越えた南スーダン共和国側にも4万人以上が難民として流出している。

JVCは、南コルドファン州の州都カドグリの学校内で避難生活を送る女子中学生に食料を配布、また戦闘により影響を受けた小学校への備品の支援、避難民を含めた住民が利用する診療所の栄養食保管庫の建設などを実施した。南スーダン側のイーダ難民キャンプでは、1月中旬に実施した生活用品(粉ミルク、石鹸、子ども用衣料)の配布に引き続き、朝晩の気温低下のため必要性が高い子ども用衣料の追加配布を3月下旬より実施する。(佐伯)



■配布された服を着る男の子。今までは服がなかった。

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

貧血予防のために 360 人の幼稚園児に対し西岸産の牛乳とガザ産のビスケットを配布中。また、衛生用品の配布により、幼稚園と家庭で毎日の手洗い、歯磨きを実践している。子ども、その母親、幼稚園教師たちがともに栄養や衛生について学ぶオープン・デーを月一回開催している。母親たちの中に、オープン・デーで子どもたちに振るまわれる栄養価の高い食事を調理するための調理用ガスを幼稚園に寄付したり、調理器具を持参するなど、「持ち寄り」の形での助け合いが見られるようになった。

貧困の厳しい村で 12 家族を対象に実施している養鶏事業では、毎日採れる卵が子どもたちの貴重な朝の栄養源となっている。順調に卵の生産数を増やしており、子どもたちに食べさせる以上に、余剰分の卵を売って収入を得る女性が増えている。この収入で、野菜や鶏の薬などを購入するケースも現れてきている。

また、昨年 12 月でいったん終了した、ガザ市内で子どもの栄養失調予防を目的とした活動は、4 月からの事業再開に向けて調整を行なっている。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療 NGO と協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などを実施している。医師と保健指導員は保健教育、健康診断、救急法講習などを学校、幼稚園、地域社会団体等で実施中。生徒から生徒へ教えていくための「トレーナーのトレーニング」も継続している。3 月には津高、藤屋が現地を視察、医療チームとともに活動計画や目標の検討を行なった。(福田・津高)



■毎朝卵を採りにいくことを楽しみにしている子どもたち。

アフガニスタン

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

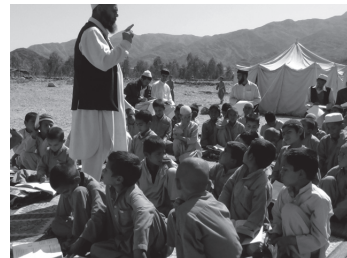
今年度の重点目標である保健委員会の病気予防のための自主活動が進むよう、具体的に取り組みやすい井戸水の改善に委員会と地域保健員が協力して取り組むことになった。09 年度から続いている母親教室では、指導補助員として立ち会っている女性地域保健員の活動を専門家が視察し指導能力や教室の運営方法を評価した。その結果、指導することは難しいが、日々の実践に役立つ情報を提供していく役割を担っていくキーパーソンであることが再確認された。

■教育支援活動

学校が休みになる 2 月初旬からの期間を利用して、モデル校で 2 回目の授業研究の準備を行なった。また、昨年 9 月から健康についての壁新聞活動をしていた女子学校では、作文のテーマの選び方や内容についての再確認を行なった。さらに、昨年同様中高生を対象とした応急手当研修が行なわれ、実践につながる技能習得の機会を提供した。

■政策提言

アフガニスタンの市民社会を支えるための NGO グループを代表して長谷部ほか他団体から 1 名が 2 月にカブールに出張し、今後の連携について情報を交換した。また、JVC の活動地域内でまた米軍による誤射撃があり、数人の女子生徒が怪我を負ったことをうけ、米軍に事故検証を求め再発防止を申し入れることになった。(谷山由)



■同僚の授業を参観する教員たち（写真後方）。

調査研究・政策提言

■開発協力適正会議に参加（1 月 31 日）

第二回開発協力適正会議が、外務省で開催された。インドネシア、スリランカ、ネパール、バングラデシュ、パキスタン、モロッコの案件について検討した。スリランカ上下水道整備計画では貧困層の利用者負担について、ネパール国際空港近代化計画では中央と地域の格差問題についてコメントし、議論した。

■ODA 政策協議会に参加（3 月 9 日）

2011 年度第三回 ODA 政策協議会が、外務省で開催された。「ミャンマー支援について」と、高橋が提案した「釜山会議後の日本の行動計画」を議題として議論した。国際会議での約束をどのように日本の文脈におとし、自らの約束として表明させ、それを市民がモニタリングすることで ODA の質の改善につなげたいと考えている。(高橋)

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎気仙沼ワークショップ

気仙沼市鹿折地区の浦島小学校にて、『ともだち展』の共同制作ワークショップを実施した。「地震で大変だと思うけど、希望をすてないで」といった韓国などからのメッセージを届ける同時に、気仙沼からも全校生徒 12 名の新たな作品が絵画展に加わった。

◎東京展

一年間の総まとめともいえる絵画展を、2 月 17～19 日に渋谷区のこどもの城で開催。日・韓・朝・中を巡った共同制作「ともだち列車」約 160 両が会場全体に並び、「わたしの宝物」のテーマで集まった各地域からの作品約 300 点をつないだ。期間中には、韓国の協力団体オリニオックドムと、中国の延吉市少年児童図書館からゲストを招き、セミナー『北東アジアをつなぐには』を開催した。(寺西)



■東京展会場では、列車をつないだアニメーションも上映。

気仙沼から

パレスチナから届いた 被災地への思い

気仙沼事務所震災支援担当

石原 靖士

二月二十三日、気仙沼の鹿折地区にある浦島小学校でパレスチナを題材にした国際理解の授業を行いました。

山と海に囲まれた全校生徒十二名の浦島小学校は、昭和二十五年の開校以来生徒にも地域住民にも愛され続けてきました。震災当時、多くの住民が避難し、避難所として開放されたのもこの浦島小学校でした。児童にとってもアットホームなこの場所は特別な



■国際理解授業の様子。全校生徒がスタッフの話を聞く。



■ガザ地区の子どもたちから届いたメッセージと絵。

国内ひろば

JVC network

校で卒業を迎えたい」と、震災後にほかの小学校に通っていた六年生が一名戻ってきました。

JVCは、これまで通学支援や学校行事への協力という形で、この浦島小学校に関わってきました。そして今回、校長先生から「震災で児童たちが大変な思いをしてきたことに間違いはない。しかし、世界の中には普段の生活の中で命の危険や飢えに苦しむ人々がいることを生徒たちに知ってもらいたい」というお話をいただき、パレスチナについての国際理解の授業を行なうことになりました。

授業当日、JVCパレスチナ担当の津高と気仙沼スタッフの三名が浦島小学校にお邪魔しました。授業の始めに、パレスチナ問題の背景やそこで生きる子どもたちの様子を津高が写真や絵を使って児童たちに説明しました。パレスチナについて馴染みなかった児童たちにとって、武器を持つ兵士がいるところで買い物をするお母さんや兵士に囲まれて通学するパレスチナの子どもたちの姿はとてもショックだったようです。

パレスチナとイスラエルがどうしたら一緒に暮らせるようになるかという話し合いの時間では、児童から様々な意見やアイディアが飛び出しました。「両方がいつぺんに謝る」、「武器を捨てる」、「イスラエルとパレスチナのいっしょの文化を創ってみる」など、子どもだからこそその素朴でありながら素適なアイディアばかり。

授業の終わりには、パレスチナの子が描いてくれたメッセージの絵画を浦島小学校の児童や先生に見ていただきました。児童たちは「たいへんな状況なのに日本のことや自分たちのことを考えてくれてすごい」と、紛争地で厳しい状況にある子どもたちからのメッセージや絵に感激した様子でした。

授業の最後に校長先生はおっしゃいました。「これまで自分たちとつながりのなかった人たちが、これほどまで自分たちを助けてくれるとは思わなかった。ところが自分たちを見てみると、普段暮らししている場所以外のところにある

これからの子どもたちには自分より大変な人たちの思いやることの重要性を学んでほしい」と。

震災があったとは言え、のんびりとした環境で過ごしている浦島小学校の児童を見てみると、長野の田舎で育った自分の子どもの頃を思い出します。周りに外国へ行ったことのある人がほとんどおらず、海外とは無縁だった少年時代。世界の出来事なんて自分にはまったく関係の無いことのように思いました。浦島小学校の子どもたちにとっても、やはり海外は遠い存在ではなかったかと思えます。

今回の国際理解の授業が浦島小学校の児童たちにとって外の世界に目を向けるきっかけとなり、中学校、高校へと成長していく彼らが少しずつ海外とのつながりを感じ取ってくれたらうれしいです。そして成長したのちには、自らの足で外の世界を歩き、自らの目で外の世界を見てもらいたい。その経験が、広い世界の中に日本人の自分が存在することを実感する機会となり、彼らが大きく飛躍する糧となることと信じています。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

1 月計 672,598 円
2 月計 15,187,676 円

	1 月	2 月
無指定	27,000 円	56,800 円
タイ	5,000 円	0 円
カンボジア	80,000 円	300,000 円
ラオス	253,000 円	5,000 円
南アフリカ	3,000 円	0 円
パレスチナ	39,317 円	153,480 円
アフガニスタン	2,000 円	167,000 円
コリア	0 円	12,500,000 円
イラク	5,000 円	0 円
スーダン	4,000 円	0 円
東日本大震災	107,281 円	2,005,396 円
洪水緊急	147,000 円	0 円

※上表には「夏 / 冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

1 月計 86,000 円 / 12 件
2 月計 18,000 円 / 6 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

1 月計 2,286,950 円 / 1,893 件
2 月計 2,281,450 円 / 1,903 件

編集後記

というわけで、東京事務所は引越しました。岡山県産の間伐材でできたフロアの床や書架だったり、ために貯めてあったヨ○バシポイントで買った 32 インチ薄型液晶テレビだったり、皆様からいただいた観葉植物だったり。…なんかもうキレイすぎてオシャレすぎて、個人的にはいまだにちょっと落ち着かないよ、というのは秘密です。ぜひ皆様も訪問されて感想を！(H)

多様な関わりを知り、伝えたインターン。

2011 年度ホームページインターン 高橋 舞里菜



学生時代にボランティアで発展途上国を訪れることはあっても、日本の NGO の現場や考え方は全然知らず、また学生ボランティアの限界も感じていた私。昨年の 3 月、就職活動をする中で、自分のやりたいこと、目指したいことを見失いながら、それでも“自分と国際協力の関わり方”をもう一度考えてみたい、ともうすぐするように応募したのが JVC 東京事務所インターンでした。

私のインターンとしての仕事は、ホームページの更新やコンテンツの作成など。ここで使うホームページに関する専門用語は、それはもうムズカシイのです。パソコン嫌いの私には格闘の日々。しかし、三ヶ月もたつと、私は胸を張って「ホームページ更新は私の仕事!!」と言えるようになりました。ホームページは、JVC を世界中に知ってもらえる窓口のような役割、大きな責任と可能性を持っている仕事でありました。スタッフからの信頼と、ホームページを見て JVC に来たという人に会うのが、仕事のやりがいでした。

JVC には本当にたくさんの方が訪れます。ボランティアさん、元スタッフ、インターン…。その多様さを知ってほしい！とつくったページが、「JVC に関わる様々な人へのインタビュー」。他の人へのインタビュー自体が、私にとっての“関わり方”を自問自答する時間でした。関わり方は人それぞれ。ですが、皆に共通していたのは、国際協力への興味関心、熱い思いを持っていること。

そう、JVC は様々な人の“自分にできることを少しずつ”、というそれぞれの想いに支えられ、成り立っているのです。私も、肩の力を抜いて、自分なりの“関わり方”を見つければいいのか、と思う事ができました。この春からは社会人ですが、JVC で学んだ、“自らの関わり方”を探して、これからも JVC に関わり続けていきます。

2011 年冬募金にご協力ありがとうございました。

2011 年冬募金集計 (郵便振替分: 2011 年 10 月 ~ 2012 年 3 月末)

1,376 件 11,363,649 円

※活動国を指定された募金は上記に含まれません。
※募金額の 20% を管理費とさせていただきます。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2012 年 5 月 ~ 6 月) :

Y9z2mvkd3d

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

第 13 回 JVC 会員総会のお知らせ

日時：2012 年 6 月 16 日（土）10:00～13:00

会場：豊島区立生活産業プラザ『ECOとしま』 展示場（地下）

議案：1) 2011 年度活動報告および決算報告

2) 2012 年度活動計画および予算案

3) 役員改選

年に 1 回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も実施いたします。
JVC の活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。ぜひご参加ください。



■代表理事の谷山が現在の世界のさまざまな課題と JVC の諸活動とを結びつきを説明しました。



■午後の交流会では、東日本大震災被災地での活動からの得られた経験を共有しました。

例年と同様、総会終了後の午後に、交流会「JVC のつどい」を企画しておりますので、こちらでもご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。詳細は、6 月初頭に別途お送りします議案書に同封 / 記載いたします。



日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000 円
- ◎学生会員 5,000 円
- ◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。
入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション（説明会）にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第 1 月曜日午後 7:00 - 8:30
- ◎第 2・第 4 土曜日午後 2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙 90%、間伐材パルプ 10%）で作成しました。



会員数（4 月 5 日現在） 合計 1,175 名
（正会員 576 名、賛助会員 599 名）